

第一章 仏の観点

覚者から観る自己(身心・客観)と宇宙世界との関係を説明してみよう。前段落では自己の身心と時間と空間は一体であることを明らかにした。其れだけではなく、宇宙(時空世界)は自己の誕生と同時に具現するものなのだ。

道元は正法眼蔵二十八卷本二十「唯仏与仏」巻で、自己と宇宙との相関をこのように説いている。「ふるき仏のいはく、山河大地と諸人とおなじくうまれ、三世の諸仏とおなじくおなじくおこなひきたれり」と明示している。

そして、この文意を、岸澤唯安老師は『正法眼蔵全講〈八〉』二十四巻「唯仏与仏」(大法輪閣、昭和四十九年七月一日)で、このように解釈されている。

「わたしどもに相当する山河大地と一緒に生まれているのだ。甲は甲に相当する山河大地とともに生まれ、乙は乙に相当する山河大地とともに生まれる。丙にしてもそのとおりであって、その甲の大地と、乙の大地と、丙の大地とはみなちがっているのだ。生まれるばかりではない。甲の大地は甲とも死ぬ。乙の大地は乙とともにほろびる。丙の山河大地は、丙の死ぬのと一緒に死ぬる(一部省略)」

岸澤師の説くところによると、甲は甲の宇宙、乙は乙の宇宙、丙は丙の宇宙であり、甲・乙・丙の死滅も各宇宙が同時に消滅するのである。

このように、自己の身心と客観の尽十方の時空世界は同時に具現化されているのである。当に仏の観点からみると、宇宙世界は自己の存在とは一体の関係なのだ。

また、禪師は有時巻の中で「われを排列しおきて尽界とせり、この尽界の頭々物々を時々なりと覩見すべし。物々の相礙せざるは時々相礙せざるがごとし、このゆへに同時発心あり、同心発時なり、および修行成道もかくのごとし。われを排列してわれこれみるなり。自己の時なる道理それかくのごとし」と、説かれている。

自己が脱落し、大悟した時節の悟後は尽宇宙の頭々物々が時々と知るべきである。その自己の真実の姿を体験することである。そして、尽宇宙と自己の一体を覚知する体験が身心脱落の大悟の体験なのである。

道元の身心脱落と仏の観点

道元の悟りの体験は身心脱落である。脱落の内証体験により、正法眼(仏の心・悟りの眼)を得たとされている。大悟の体験は南宋の留学時代のことである。天童山において、一山の修行僧が、四月十五日から七月十五日期间に集中して参禅する、夏安居の出来事のことであった。

曹洞宗の伝記『三大尊行状記』に道元禪師の身心脱落の内証を記述されている。

「ある日、僧堂(雲堂・修行僧が坐禅をする場所)で、早朝に坐禅をしていると、入堂した師如浄が修行僧たちに叱咤激励の言葉を発した。その一声を機縁に、道元は忽然と真実の自己に目覚めた。早速、方丈の師如浄に参じ自らの体験を申し述べる。身心脱落来る。如浄は身心脱落、脱落身心の言葉をもって、特別な内証体験を認めた」

その後、如浄は道元に伝法の証明として、宝慶丁亥三年(一二二七年)に「嗣書」(仏となった伝法の証明書)授けた。

禪師の身心脱落の内証体験は学問上問題がある。師如浄から何時の時点で伝法されたのかである。叱咤時脱落と面授時脱落である。叱咤時脱落とは、夏安居中の身心脱落来

ることである。それに対し、面授時脱落は宝慶元年（一二二五年）乙酉五月一日の初対面時のことであり、わたしは前者の叱咤時脱落が真実であると考えている。いま、身心脱落の内証体験の世界を述べようとするのも、このような複雑な学問的背景が存在する。

道元が師如浄禅師のもとで体験した、身心脱落の心理的内証に迫ってみよう。其のことによって、正法眼蔵、有時卷の基本的観点を得ることができる。有時全卷を理解するための正法眼でもある。巻頭の悟りの境地から観た「仏言 有時高々峯頂立、有時深々海底行、有時三頭八臂、有時丈六八尺。有時拄杖拈子、有時、露柱燈籠。有時張三李四、大地虚空」の宇宙の真実相を覚知することにほかならない。道元が「古仏言」の当に仏から観た森羅万象の真実相と、有時を書く基本の正法眼が明確になる。道元禅の枢要を知ることである。

では、身心脱落の身心が「脱落」するとは、自己の身心の心理的認識上にどのような覚知体験するのであろうか。過去において、僧侶・研究者、等々が、論理的に説明されたことは皆無にちかい。個人的な宗教的体験の世界なので解明することは困難である。わたくしも大悟の経験がないので推察で説明してみよう。

過去の禅者たちが覚りの体験時に、道元と同様な「脱落」に近い言葉を発することがある。道元の脱落・雲門の透脱・安谷の雲門透脱の説明・漸源の世界崩滅の順序によって明らかにしてみる。

1 道元の脱落

道元の『正法眼蔵』第一巻「現成公案」に、身心脱落の言葉が説示されている。

「仏道をならふといふは、自己ならう也、自己をならふというは、自己をわするなり。自己をわするるといふは、万法に証せらるる也。万法に証せらるるといふは自己の身心および他己身心をして脱落せしむるなり」

禅師は仏道をならふとは、真実の自己を覚知することであると述べられている。そして、真実のわれを覚知するとは、自己をわすれることである。自己をわすれるとは万法と一体（証）になることであり、一体になるとは自己(身心・主観)と他己(万象・時空・客観)の、二者対立から脱落することであると説かれている。身心脱落の体験は二者対立から透脱することが読み取れる。

2 雲門の透脱

曹洞宗で宗風を挙揚するための禅語録として、宏智正覚禅師の『従容録』六巻がある。宏智正覚の法の後継者である、万松行秀が師の『宏智頌古百則』に、本則と頌古を加えたのが『従容録』である。宏智正覚(一〇九一～一一五七)は、山西省の出身であり李氏の生まれである。宏智の『従容録』六巻の第十一則に「雲門両病」の公案が示されている。雲門とは、中国禅の雲門宗開祖であり、雲門文堰(うんもんぶんえん、不明～九四九)のことである。公案とは師が修行僧に悟るために問題のテーマをさずける。其の一つが雲門両病であり、禅僧が覚る機縁を明らかにする。

従容録『禅の真髓、従容録(しょうりょうろく)』(安谷白雲、一九七三年十月、春秋社)

「挙す。雲門大師云く、光、透脱せざれば両般の病あり。一切処、明かならず、面前に

物有る、是一なり。一切の法空透得するも、隠隠地に箇の物有るに似たり。亦是れ、光、透脱せざるなり、(省略)」

安谷師は光透脱(脱落)の体験をこのよう説かれている。「光とは悟りだ。自己の光明のことだ。悟っても大悟徹底出ないと、何か薄霞がかかったようで、はっきりしない。それが光が透脱しないということだ」、そして、師は覚らない前は、誰でも、こちらに我あり、向こうに我でない物があると(省略)。然るに悟ると、むこうに物があると思ったのは全く誤りで、すべては自分だという世界にめざめる。それが悟りだ、と説かれている。

3 漸源の世界崩壊

最後に、脱落ではなく、禅師が眼蔵第九「古仏心」巻で、世界が崩滅(全時空・自己が脱落)するようすを明らかにしている。ようするに、身心脱落時には、眼前の時空世界の一切が崩壊する意である。凡夫の時空観から覚者の、安谷師が云う、こちらに我あり、向こうに我でないものがある、その考えは全くの誤りで、すべて自分の世界だと体験することが悟りである。

禅師は、『正法眼蔵』第九「古仏心」巻で世界崩滅をこのように述べている。

漸源仲興大師、因僧問、「如何是箇仏心《如何にあらんか是れ仏心》」。

師云、「世界崩壊《世界崩壊す》」

僧云、「為甚麼世界崩眼会《甚麼として世界崩壊なる》」

師云、「寧無我身《寧ろ我身無からん》」

有る僧が仏様の心とはどのような境地ですかとの質問に、大師は世界が崩れ滅することだと返答した。いかにして、崩壊するのですかと再度問いかけた。自己の身が無いことである。

禅師は二人の問答にたいして、自己の見解をこの様に述べている。「いはゆる世界は十方みな仏世界なり。非仏世界いまだあらざるなり。崩壊の形段は、この尽十方界に参学すべし、自己に学することなかれ」自己が脱落し、世界が崩滅すると、尽十方世界は全てが仏の世界で有ると理解すべきなのである。このときは凡夫の自己の存在と理解してはいけないと説かれている。

道元の身心脱落時には、どのような内証体験が覚知されるのかを、「現成公案」の自己の身心即他己の身心脱落することである。雲門の「雲門両病」光透脱、漸源の「世界崩壊」と、安谷・道元の二人の見解をもって、具体的に説明した。

次に道元の身心脱落を三つの大悟の内証体験の事例を踏まえながら具体的に明らかにしてみよう。

禅師は、眼蔵五十六「見仏」巻で、自己が仏を見る、仏に成ることを、この様に説かれている。

「釈迦牟尼仏、告大衆言、「若見諸相非相、即見如来」。いまの見諸相と非諸相と、透脱せるなり。ゆえに見如来なり」

お釈迦さまが修行者達に向かって説かれた。如来を見る、仏を見ることは、諸相の相を見ることではない。それに対し、禅師は仏を見るためには、見諸相(全宇宙・客観・

主観・身心)と非相(空・実相)を、透脱せる(脱落)体達(内証)なり。そのことが、見如来(仏を見る・仏になること・成仏すること)である。

4 身心脱落は主客脱落地(非思量)

禅師の身心脱落の内証体験は主客脱落地(非思量)であり、主観即客観即実相を脱落することが、仏に成ることであると明らかにしている。身心脱落とは内証(大悟)体験によって、正法眼(仏の悟りの眼)を得ることであり、『正法眼蔵』・「有時」を理解するための基本観点なのである。と同時に、道元の只管打坐である坐禅の解脱地の非思量と大悟の境地は一如である。

5 坐禅の非思量(解脱の境地・三昧)

これまでは、身心脱落の「脱落」の体験を中心に解き明かしてきた。本文からは、坐禅の仏の境地と凡夫の時空観から、仏の宗教的時間論の世界を論じてみよう。なぜなら、凡夫の心と仏の脱落の境地は、坐禅の非思量(解脱の境地・三昧)とは一体の関係で成立しているからである。

始めに坐禅の境地を説明してみる。道元の主要な教義は「只管打坐」の教えである。結跏趺坐(坐禅相)することが、仏道の要諦であり仏の境地である。仏坐、兀坐、兀兀地、自受用三昧とも云う。仏が仏の坐禅をすることである。

禅師の坐禅に関する著書に「普勸坐禅儀」・「坐禅儀」・「坐禅歳」等々が存在する。枚数の関係上要約して説明してみる。正法眼蔵第十二巻「坐禅歳」で、禅師は坐禅の境地をこのように指し示している。

薬山弘道大師、坐次有僧問《薬山弘道大師、坐次に、有る僧問ふ》「兀々地思量什麼」
師云、「思量箇不思量底《箇の思量地を思量す》」。

僧云「不思量地如何思量」。

師云「非思量」

大師の道、かくのごとくなるを証して、兀坐正伝すべし。

薬山禅師と修行僧との坐禅の境地における問答である。本文を要約すると、思量と不思量と非思量になる。この三つの心の境地は分離している関係ではない。禅師の直弟子詮慧の嗣経豪は『御抄』「不思量も思量も皆、非思量と一なる故に」と説いている。思量とは、心・意・識・念・想等々のことであり、一般的な日常の心のことである。不思量とは、空・仏性・実相、真理心、である。『御抄』によると、非思量は思量と不思量の三つの心は一体であると同時に脱落した境地であることを示している。道元禅の基本的な悟りの境地は非思量であり、最終境地が解脱地であると理解すべきなのである。

また、禅師は解脱地である、非思量全体の境地を『坐禅儀』でこのように述べている。

「身心をとゞのへて、欠気一息あるべし。兀々と坐定して思量箇不思量地底なり。不思量底如何思量。これ非思量なり。これすなはち坐禅の法術なり。坐禅は習禅にあらず、大安楽の法門なり。不染汚の修証なり」

このように、非思量地が解脱であり、仏の境地であり、坐禅の要諦であり、脱落であり、不染汚の修証である。坐禅の非思量地が道元禅の要諦と理解すべきであり、禅師の身心脱落と坐禅の非思量は一如なのである。